

1. 先行研究の紹介（本紙）
2. 『三国志』荀彧伝と、それに関連する諸史料の訓読（別紙）
3. 「中華三国志」での二次会

最初の質問：荀彧は「後漢の忠臣」ですか、または「曹魏の謀臣」ですか。それはなぜですか。

1) 丹羽允子「荀彧の生涯——清流士大夫の生き方をめぐって——」

『名古屋大学文学部二十周年紀年論集』1969

- ・ 曹操が漢臣を排除する動きのなか、最後まで臣節を守って殉じた悲劇の人
(范曄『後漢書』荀彧伝の評・賛、趙翼『廿二史劄記』、矢野主税『門閥社会史』)

⇔ 曹操の体制を育てた人（高祖・光武に曹操を比する）【史料1】

- ・ 才能主義を自ら実践【史料2】
人材を推挙：荀攸、鍾繇、陳羣(潁川)、司馬懿(河内)、鄒慮(高平)、華歆(平原)、
王朗(東海)、荀悦(潁川)、杜襲(潁川)、辛毗(潁川)、趙儼(潁川)ら
- ・ 曹操は荀彧の作戦に従い【史料3】、荀彧を万歳亭侯とする【史料4】

- ・ 荀彧の生涯は、曹操の九錫の議を阻んで自殺したという一事を除き、
曹操勢力の拡大に結びつかない事業はない → 漢臣としてイメージににくい
- ・ 党錮以後に形成された 清流士大夫の社交界(何顛グループ)の政治的志向の活動の帰結

2) 美川修一「『三国志』—荀彧の死—」『中国正史の基礎的研究』早稲田大学出版部 1984

- ・ 建安17年末の荀彧の死は、状況が不明
『三国志』荀彧伝は憂死(病死)【史料5】、同注引『魏氏春秋』は服毒自殺【史料6】
『後漢書』荀彧伝は両者をはぎ合わせ、「憂」死を服毒死に置換（cf.皇后紀 郭皇后条等）
- ・ 毒薬を飲まざるを得ない状況(心理的なものでない)にて、強制的服毒自殺か
『魏氏春秋』の食器は、漢景帝の周亜夫の故事（『漢書』周亜夫伝）
- ・ 服毒死は自然死と取り繕われ、死者が復権される（『後漢書』后紀 王美人条等）

- ・ 建安9年7月に鄴城を攻略、9月に冀州牧、**九州制の復活**を検討【史料3】
荀彧に阻止されたが、荀彧の死の**翌年(建安18年)1月**に九州制が実現
- ・ 建安17年に董昭が**九錫・魏公**を建議、同年末に荀彧の死、**翌年5月**に魏公へ昇進
→ 建議を阻止できた荀彧の自殺でなく、阻止された曹操の殺意が想定される

- ・ 荀彧の立場は漢臣、一貫して漢朝の保全と献帝の擁護のため行動（侍中・守尚書令）
建安17年1月以降、**伏皇后の手紙**事件で、曹操の信頼を失う（荀彧伝 注引『献帝春秋』）
- ・ 魏公＝異姓の封建に反対（九錫は容認）

- ・ 建安17年10月、曹操【史料7】が荀彧に、軍への同行を突発で要請（『後漢書』荀彧伝）
直後荀彧は空器を送られ、寿春で12月初旬に死亡
戦闘らしい戦闘がなく(呉主伝【史料8】)、九州制・魏公が実現【史料9】
→ 伐呉は、荀彧を参丞相軍事に任命し、曹操の統属下に入れ、軍中で殺害するための陰謀

3) 田中靖彦「『後漢書』荀彧伝について—『三国志』との比較を中心に—」

『恵泉女学園大学紀要』第24号 2012

- ・ 陳寿『三国志』、范曄『後漢書』、袁宏『後漢紀』を比較
范曄は荀彧を、曹操の謀臣でなく、漢の忠臣として描く（『三国志』等を改変）
- ・ 范曄は、守宮令(宦官の欠員補充、董卓との関わり)、亢父令(董卓政権)の官歴を抹消
荀彧が「匡佐」を懐き、曹操を晋文公(臣下に終始)に擬えたと追記
曹操への賞賛、曹操との婚姻【史料3】、曹操の属官(鎮東司馬)就任を省略
- ・ 范曄は、荀彧の反対により、魏公・九錫が中止された(**事遂寝**)と明記
荀彧に軍を慰労させたいと願う上表は范曄のみが採録、曹操が献帝に事後承諾を逼る
荀彧を服毒死と明言し、「**帝哀惜之**」と追記
→ 司馬光『資治通鑑』、趙翼『廿二史劄記』、羅貫中『三国演義』の荀彧像に影響

最後の質問：荀彧は「後漢の忠臣」ですか、または「曹魏の謀臣」ですか。それはなぜですか。

おしまい